MEETING REPORT

第36回アメリカ血液学会報告

細胞遺伝学研究部
丸　義朗

写真中央 J. Ihle、右私、左親友の稲葉君(St. Jute 留学中)

1994年12月2日～6日テネシー州ナッシュビルで開かれた第36回アメリカ血液学会へ参加した。私は昨年にひきつづきBCR-ABL sessionで口頭発表しました。今回の学会で重視されたもの、私なりに重要と考えたことを報告致します。会長はArthur Niehuis。彼がPresidential Symposiumにとりあげたのは血液細胞分化の分子生物学であり、Don Thomas LectureにTom Maniatisが遺伝子発現制御を講演したことからも、血球分化増殖の遺伝子メカニズムに重点がおかれたことは明らかである。最も聴衆を集めたのは血液増殖因子シグナル伝達のsessionで、座長のJ. Ihle（写真中央、右は私）、J. Griffin、J. Darnellの3名がJAK/Stat系について、J. Schlessingerがチロシンリン酸化の重要性について述べた。血小板／巨核球の生物学が改めて注目されたのは、c-mpl受容体リガンドがクローニングされたためだけでなく、内皮／血小板に局在するmultimerinが同定され、今まで原因不明であった出血性疾患の一部がやはり遺伝子病と位置づけられたこともあると思われる。Apoptosis関係では、p53非依存性WAF-1誘導、Bad、BBP、Bmi-1などの新しい関連分子が発表された。白血病発生では染色体転座による発癌遺伝子が中心で、TEL-PDGFR、Tel-ABLが話題の中心であった。AML-1の生化学／生物学的活性については対立する議論が多かった。Casein kinase IIによる白血病発生には驚いた。BCR-ABLと結合する多くの蛋白が示されたが、それらの生物学的意義はほとんどが不明であった。ABLとp53との結合は生物学が存在し、発展するかもしれない。学術的知識の獲得はもちろんのこと、J. GriffinやC. Sherrなど多くの人と接する機会を得ました。医科研代表の浅野教授、中畑教授にも現地でお世話になり、医科研国際交流基金に心から感謝致します。

編集後記

今回は退官される方に一言お願いしました。例によって、直前での原稿依頼になってしまい、誠にご迷惑をおかけいたしました。快く、引き受けて下さった方々に感謝致します。4号館も、かつての馬小屋跡にその姿を現しました。医科研はめまぐるしく変わっているようです。

素人集団で編集を始めてから、はや一年が経とうとしています。内にあっては、大所帯となった医科研で、病院、研究部、事務間の情報の流れを少しでもよくし、外に対しては、医科研を紹介する読みやすいパンフレットとなるようにとやってきました。さて、うまくいっているでしょうか。様々なご批判ご提案をお寄せ下さい。

○医科研NOW編集室／〒108 東京都港区白金台4-6-1 東京大学医科学研究所 ☎03-5449-5298
委員長：渡邊俊樹　委員：北　潔・菅野純夫・佐藤典治・井桁幹隆・仲澤　宏・蔵野妙子・松木恵司